

R3 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
作曲	教授	小林 聡	全ての項目について努力を続けたと思う。COVIDのためかなりの制約があるが、本学の交際交流に関して、タンベレ応用科学大学との、USCDとの交流には自ら窓口となり、積極的に関わってきた。その他、自ら窓口になり、客員教授や海外の演奏家を招聘する計画も進めている。本学と地域社会との連携についても、本学の特色を生かしながら、地域社会に貢献できる道を常に考えてきた。本学の社会貢献を進めるため、努力をしてきたと思う。
作曲	教授	山本 裕之	今年度もCOVID-19が収束せず、その対応が難しい一年となった中で、大学においては多くの授業を対面で行うことができた。昨年度は本欄に、今後オンラインが推進される社会の中で、非オンライン活動をどのように活かしていくのかを課題として提起したが、こと授業に関しては対面に戻るとオンラインは非常に限られたツールであると感じた。しかしそれはオンラインの利点を積極的に活用しようとしていない表れである可能性もある。このことについては今後さらに検証していく必要があるかもしれない。「対面にもどればオンラインの役割は限定される」ということは、大学の授業に限らず研究（演奏・作曲等）にもある程度当てはまると考えていた。しかしながら我々音楽関係者の間では、COVID-19が一時的に落ち着いた2021年秋の段階で「コンサートに客足が戻らない」といった声が囁かれた。コロナ禍が推進した公演のオンライン化は、その急激な技術の普及に伴って、たとえば遠方まで足を運ばなくて良いといった利点が可視化され、芸術の享受がある程度オンラインでも満たされうるといった認識が人々の間で生まれつつあるように感じられる。このように芸術環境が大きく変化した時に、芸術家を育てる大学がそれまでの価値観や習慣を再認識し温存するのか、それとも新しい方法論を積極的に取り入れて研究や教育に反映させるのか（あるいはその両方のバランスをどのように採るのか）について、早急な対応が必要であると考えている。そしてそのこと自体が実は「芸術的思考」であると考えている。
作曲	准教授	成本 理香	全体的に概ね目標は達成できた1年であった。特に作曲、論文では当初の目標より多くの創作と論文執筆に取り組めた。教育活動としては、初の試みであった美術学部陶磁専攻との合同授業が成功したこと、ソルフェージュにおいてようやく教科書出版にまで持って行けたことは自分にとって大きな喜びであった。大学運営については年度が始まった後に降ってくる要職、役割に忙殺された。学部全体をみても数名の特定の教員に要職や仕事が集中していて、これは今後学部全体で改善するべき点であると考えている。
作曲	准教授	安野 太郎	研究、教育、大学運営、社会貢献。1年目の活動ということもあり、ついていくのに必死だったが、それぞれの活動において一定の成果を残せたと感じている。今年は大学の一年間の時間の流れを体感したので、その経験をもとに来年度はさらに意欲的な活動を行ってきたい。
音楽学	教授	井上 さつき	相変わらず続くコロナ禍のため、さまざまな制約があったが、年度当初に計画したことは、ほぼ実施できたことは嬉しい。また、定年退職を記念して、7名の教え子と共に、研究書『音楽と越境－8つの視点が拓く音楽研究の地平』を音楽之友社から刊行できたことをうれしく思っている。
音楽学	教授	安原 雅之	コロナ禍において、大学運営および教育活動に関わる業務が非常に多くなってしまった。
音楽学	教授	東谷 護	学術面では科研費プロジェクトの研究で50年ほど眠っていた貴重な一次資料を発掘したことは大きな成果だった。現在、この一次資料について史料批判を行っているところであり、来年度にはそれを踏まえての論考なり学術書籍なりとして発表したい。大学運営面でオーバーワークになってしまったので、その分は来年度に研究時間として返してもらいたいと思う。
声楽	教授	中巻 寛子	長引くコロナ禍の中、教育活動、大学運営に関しては全力を尽くし、一定の貢献をできたものと考えている。ただ、その一方で個人としての研究に充てられる時間が減り、その進展に影響があったことは否めない。これに関しては、次年度にさらなる覚悟と計画性を持って臨みたいと思う。

R3 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
声楽	教授	森川 栄子	昨年度に引き続きコロナ禍下での1年間となったが、教育面においてはこれまで以上の成果を挙げることができたといえよう。研究面においては引き続きネガティブな影響を受けつつも、リサイタルをなんとか実施出来る見込みである。その他の演奏発表活動や、例年実施してきた海外研修が行えなかったことは非常に残念である。コロナ禍の速やかなる収束に期待したい。
声楽	教授	小原 啓楼	引き続きコロナ禍の渦中において実技面での制約が懸念されたが、教員・学生・事務局の協力によってカリキュラムへの影響は最小限に抑えられていると感じる。しかしカリキュラム以外の活動やコミュニケーションへの制約は、知の集合地である大学のアイデンティティに重大な影を落としており、制約を補う次策を模索しつつの年度となったが、それについては効果的な具体策は見いだせなかった。 また、特に声楽を取り巻く状況は未だ厳しく、予見される市場の不可逆的な変化に対応すべく、新たな価値観に基づいた示唆・コーチングを心がけたが、これについては一定の成果を見出しつつあり、前述の具体策とも繋げていければと考えている。
声楽	准教授	川島 幸子	コロナ禍の中、感染のリスクが一番高い分野なのが声楽ということもあり、研究活動の一つである演奏活動が全く出来なかった。来年度こそはコロナの状況が収まって演奏活動を再開できるようになりたいと強く願っている。
声楽	准教授	初鹿野 剛	コロナ禍2年目の中、初めての専攻主任は、主任の所掌事務のみならず、前年度のコロナ対策チームの所掌も併せて行わなければならなかったが、常勤、非常勤教員の協力により何とか務められた。また、大学オペラについても、舞台美術チーム、音楽部、演出部、関係業者の献身的な努力により立派な公演となり、お客様からも数多くの好評が寄せられた。今後も参加する学生の演奏機会の拡充、ご来場のお客様の満足のために頑張りたい。
声楽	准教授	森 寿美	研究活動、社会貢献では、コロナの状況でもできることが増え、昨年よりも活動を広げることができた。大学での生活も2年目になり自分が想像していたよりもそれぞれの項目で活動の比重が重くなってきた。特に教育活動、大学運営では、仕事が多くなってそれぞれが疎かにならないようにしっかりと改善点を踏まえて来年度に臨みたい。
ピアノ	教授	熊谷 恵美子	自身の研究と教育、大学に関わる運営、社会貢献のどれも私にとっては大切なものであるが、どれも十分ではないのが現状である。特に教育面に関しては、研究との関わりを深めていきたいと考える。
ピアノ	教授	北住 淳	音楽文化が「感染下の市民生活」に与える影響はこれからさまざまな形で現れてくるだろうが、我々に課せられているのは「持続的な取組み」「地元での自己錬磨」でありつづけて考える。生活の回復・日常の見直しが「文化芸術なくしては有り得ない」ことを、卒業生も含め本学全体の活動が証してくれるので、今後もこの取組みの「持続可能性」について模索し、追究していきたい。
ピアノ	教授	掛谷 勇三	施設整備委員会副委員長としてマスタープラン2021と長寿命化整備計画基本設計の策定・検討、奏楽堂非構造部材耐震工事、奏楽堂舞台床張替工事、といった大きな施設整備関連の業務に関わった。昨年同様研究活動は続け、リサイタルを開催した。専門実技教育では一人一人にしっかりと時間を使って指導し、個々の成果が確認できた。
ピアノ	教授	内本 久美	コロナ感染防止対策に留意しつつ学生の指導や個人の研究を継続して行った。
ピアノ	准教授	鈴木 謙一郎	前年度よりコロナの収束傾向がみられ、授業形態ももとに戻りつつあるため、学生も意欲的に勉強に励むことができた。
ピアノ	准教授	中尾 純	近代ロシアの作曲家、A. スクリャービンの生誕150年を記念し、ピアノソナタ全曲演奏会（全3回）のうち、第2回までを開催した。

R3 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
ピアノ	准教授	武内 俊之	今年度は、自分自身の研究を纏め一つの完成された成果を収録という形で示すことができたのが、大きく評価できると判断する。その果実を受け、また新たな研究対象に向け、より芸術的なものを産み出していけるよう、誠実に取り組んでいきたい。
弦楽器	教授	福本 泰之	コロナ禍による学生の心身の不調に十分寄り添えなかったのではと反省。コロナ禍のためアンサンブル系の授業での学生の出欠管理の難しさを感じた。コンサート実施、出演、社会貢献において、平常時のようにとはいかないもののコロナ前に確実に戻りつつある。
弦楽器	教授	花崎 薫	研究活動としては、ベートーヴェンのチェロとピアノのための全作品（ソナタ5曲、変奏曲3曲）のレコーディングを行えたことは大きな研究成果であると考えている。クラウス・カンギューサー短期客員教授をドイツから招聘し、コロナ禍で2週間の隔離のことも苦労はあったが、3つのコンサート、2ヶ月の短期集中レッスンを行っていただいたことは学生にとって大きな刺激となったと思う。人事委員長としては採用人事、昇任人事を無事に行うことができた。
弦楽器	教授	白石 禮子	今期も新型コロナウイルスの影響で演奏会のキャンセル或いは延期があり、研究活動の部分では影響があった。教育活動としては、コロナ感染予防に最大限の注意を払いつつも対面レッスンをしっかりと行い、接触を避けなければならない為、技術的な事柄の伝達に於いては多少不便があったものの、充実した内容となるよう強く心掛けた。今年度はかつてないほどクラス学生数が多かったが、学生は皆非常に勤勉で、自身の練習やレッスンに集中して臨んでおり、結果、大変優秀な成績で大学院を修了した者や学外演奏会に出演した者等、学生への指導効果は例年と全く変わっていないと確信している。社会貢献では、コロナ禍ながら開催されたオーディションやコンクールの審査を計画通り行った。
弦楽器	教授	桐山 建志	前年度に引き続き、入試委員長として感染症対策を講じた入試の実施、本学での共通テストの円滑な実施に務めることができた。また、研究活動や教育活動では予想以上の成果をあげることができた。
弦楽器	准教授	渡邊 玲雄	総括・コロナ感染対策を施しながら、学生一人一人に昨年以上に向き合うことができた一年でした。学長補佐として、大学の大事な会議にもしばしば携わるようになり、大学運営に関して、教員目線、学生目線双方からの視点を持つ必要があると考えさせられる一年でした。学生は、本来の学生生活に色々な制限が続く日常に、ストレスを拭ききれないところを感じているように見受けられました。大学で学ぶ環境は、できる限り制限なく大学生生活を謳歌してもらえるよう、そのために出来ることを考えていけたらと思います。
管打楽器	教授	倉田 寛	今年度も新型コロナウイルスの感染拡大防止策における対応に追われ、通常とは異なる授業形態が取らざるを得ない状況だったが、逆に音楽を生で伝える大切さを再認識できたと共に、メディアを通じたミュージックエンタテインメントの必要性和多様性を模索することができた。その一つとして、学生達とリモートを通じて制作した室内楽作品などは、新たなビジネスを生み出す可能性があると感じた瞬間でもあった。大学運営においては、専攻主任という大任を仰せつかり、責任と緊張感の中、運営と教育そして研究のバランスをか取る事ができた。そしてコロナ対策チーム委員会メンバーとして大学運営に尽力でき、学生が安心して対面授業を受けられる体制を整えられたことに安堵している。
管打楽器	教授	深町 浩司	今年度もコロナ禍がつづき、さまざまな事柄が制限を受けその状況も常に変化するなかで、研究や社会活動を積極的にやることはとても困難であったが、多くの人に協力をいただき、計画した内容を概ね達成することができた。
管打楽器	准教授	橋本 岳人	コロナ禍の為、残念ながら本年度も多くの研究活動が中止、延期になってしまったが、学内の教育活動、学生オーケストラ演奏会等、感染対策に細心の注意を払い無事行う事が出来た。特に中心になって動いていた愛知室内オーケストラとの合同演奏会は新たな試みで、多くの学生に刺激を与え今後も継続していけるように働きかけていきたい。名古屋フィルハーモニー交響楽団との合同演奏会も好評を得ており、本学と東海地区のプロオーケストラとの関係をより深め、微力ながら東海地区の音楽界に貢献していければと思っている。

R3 総括コメント（音楽学部）

専攻・コース名	職名	氏名	総括コメント
管打楽器	准教授	ブルックス 信雄 トーン	ちよとずつ音楽の世界は動き出していたのに、オミクロン株が現れてまたブレーキがかかってしまいました。来年度は音楽の世界を盛り上げるための活動を増したいと思います。
管打楽器	准教授	井上 圭	若年層が管楽器を学ぶ機会の減少、環境の悪化は顕著であり、交流を持つことは容易ではなかった。コロナの状況が良かった時期に幼稚園でアウトリーチを行えた点は評価できる。その他は概ね達成できた。
教養	教授	水野 留規	研究・教育・大学運営・社会貢献のいずれについても、予定していた成果を概ねあげることができた。以前の年度のように海外で教育・研究活動を行うことはできなかったが、その分、腰を据えて課題に取り組むことができた。
教養	教授	三宮 敦生	教育面では授業アンケートの結果を見る限り、『心理学』の授業は学生が十分満足できる授業ができたように思われる。ただし、『教育心理学』の授業は若干の課題を残した。研究面ではICP2020+(online)で発表し、また展望記憶の研究について理解を深めることができた。大学運営面では教職課程の業務をスタッフ一堂と力を合わせて全うすることができた。社会貢献面では例年行っている科学講座がコロナ渦で中止となった。
教養	准教授	井上 彩	研究：科研費による研究課題を延長することができ研究を続けた。研究成果をまとめた論文を共著の論文集に投稿し査読を経て採択され現在印刷中である。もう一件の科研費による研究課題ではハワイ大学教授との共同研究を予定していたが今年度も渡米できず次年度に延期となった。教育：今年度はすべての授業を対面授業で実施した。感染症対策のためアクティブラーニングの一部の活動を実施できなかったが、様々な感染症対策による制限にもかかわらず学生達の学修意欲は高いことを実感する。大学運営：新型コロナウイルス感染対策も2年目となり当初のようなイレギュラーな事態への対応という側面は減りつつも未だ予断を許さない状況が続いている。
教養	准教授	大塚 直	令和3年度はコロナ禍が続いたため、昨年度と同様にヨーロッパへの渡航が制限され、予定していたベルリンでのホルヴァート研究ができなかった。しかしホルヴァートの新ウィーン全集版や研究と関連する様々な図書資料を購入して、論文を執筆した。次年度から初期ホルヴァートについて準備的考察を進めていきたい。
教養	准教授	三品 陽平	研究活動、教育活動、大学運営に関しては、計画通りに実施することができた。特に大学運営に関しては、教職課程の自己点検評価のための準備や新科目への対応において進展が見られた。社会貢献に関しては、コロナ感染拡大によって以前通りの活動が難しくなっているため、ウェブ会議システムを活用するなどの対応を今後検討していきたい。